

その人らしく最期まで

自分のことを自分で決められなくなってしまったら

認知症が進み自分の気持ちを伝えることが難しくなると、どんな介護を望むか認知症の人に確認することが難しくなります。

「飲み込む力が衰えて、口から食べられなくなったら胃ろうを造るのか」

「がんなどの命にかかわる病気になったら、どこまで治療を希望するのか」

「体のことだけでなく、お金の問題や人生の最期はどこで迎えたいのか」

などの大きな決断を家族が代わりにしていくことになります。ここで重要になるのが、認知症の人がこれらのことについて、どう考えていたか、過去にどんなことを話していたかということです。

アドバンスケア・プランニングや人生会議という考え方があります。これは「もしものときのために、あなたが望む医療やケアについて前もって考え、家族等や医療・ケアチームと繰り返し話し合い、共有する取組み」（厚生労働省）で、認知症の人だけでなく、すべての人を対象としています。近年、エンディングノートなどを用いた意思表示が取り上げられていますが、重要なのはどれだけ話し合ったかということなのです。たとえ書面に残っていなくても、認知症の人が過去に何気なくこぼした言葉や、家族で話し合った時の様子から、大切な家族の気持ちを「きっとこうしてほしいと思っているに違いない」とくみ取ることができ、その人の望む介護につながります。



人生会議

家族それぞれの思いと食い違い

家族間で介護への思いの対立や食い違いが生じることがあります。介護家族へのアンケート調査には以下のような回答がありました。

【主に介護している家族が感じた食い違い】

- たまにしか会わない家族に対して認知症の人が取り繕うため、認知症と信じてもらえない
- 自宅での介護を続けたいのに、ほかの家族が施設入所を強く勧めてくる
- 施設入所や介護サービスの利用は必要ないと言われる
- 認知症になったのは、同居している家族の対応が悪いせいだと言われた など

【介護を手伝っている家族が感じた食い違い】

- 主介護者が認知症の人を思い通りにしようとして本人が混乱した
- 認知症の人が言ったことを鵜呑みにしたことを責められた
- 主介護者が認知症の症状を本人の性格だと言って認めない など

家族だからこそ、互いによかれと思っただけの言葉や行動が相手を深く傷つけてしまうことがあります。介護が必要になる前に、認知症や介護を自分のこととして具体的に考え、家族で話し合える関係を築くことが大切です。それでも、現実と直面すれば対立が生じることもあります。家族だけでは冷静に解決することが難しい時は、ぜひ、ケアマネジャーや主治医などの専門職に相談してください。第三者に話を聞いてもらうことで気持ちの整理ができ、解決策が見出せることがあります。